

テーマ

「できる」ための手立てを考える

適用分野

スポーツ運動学（発生運動学）、スポーツコーチング、体育授業における技術指導



研究名称

スポーツ運動における動感身体知の発生

氏名所属

吉本忠弘 教授
全学共通教育センター

内容

「上手になりたいけど上手にならない」、「分かっているのだけれどできるようにならない」等、スポーツ運動の指導場面では様々な運動問題が生じます。このような運動問題を解決し、価値ある運動文化を人から人へと伝承させることを目的として、「発生運動学」は創設されました。発生運動学は、旧東ドイツのマイネルによって創設された「スポーツ運動学」を基盤として、日本の金子明友が現象学的立場から再構築した「運動分析の理論」です。発生運動学で扱われる「価値ある運動文化」とはスポーツ種目やわざの名前を意味するのではなく、その運動文化を成立させている、人々の「動感身体知」を意味します。ある運動が世代を超えて伝わるのは、その運動の「コツ・カン」が人から人へと伝わるからなのです。このような活動における最大の関心事は「どのようにしてできるようになるか」ということです。各スポーツ種目においては様々な動感身体知が扱われますし、体育授業のように、ある一定の運動課題が定められた場面では、生徒の動感身体知がどのように発生していくのか、または教師は生徒の動感身体知をどのように発生させるのか、といったことが常に関心事になります。本研のテーマで

ある「スポーツにおける動感身体知の発生」は二つの分析拠点から行われます。一つは当該運動を指導する立場、すなわち指導者・教師の立場からみた動感身体知の発生です。そしてもう一方は、実際に我身で新たな運動のコツを掴もうとする立場、すなわち学習者の立場からみた動感身体知の発生です。前者の立場で分析を行うには、動感促発身体知、後者の立場の場合には動感創発身体知が、それぞれ重要です。

どちらの立場から分析を行うにしろ、発生運動学では、人間の運動を「直観」によってありのまま捉えることを重視します。すなわち分析機器を用いて精密に分析することを目指すのではなく、観察・対話などを重視して、分析者が感じたことを記述することによって、他者に理解してもらうことを目指します。

運動指導の現場では、簡単に解決できない問題が山積みです。欠点を指摘する、あるいは手本となる者の動きを示しても、一向に運動問題が改善されないことは珍しくありません。そのような場合に、問題の本質をどのように解釈し、解決に向けてどんな手立てを講じるのか。本研究では、運動問題の解決至った（あるいは至らなかった）様々な事例の分析を通して、「できるを生み出す動感身体知」の背景に迫ります。

キーワード

動感身体知、コツ・カン、スポーツ運動、例証分析

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究